

言葉への不信

——「黒田三郎論」——

吉岡 徹

黒田三郎はしばしば「生活派の詩人」「生活詩人」といった名で呼ばれる。確かに戦後の作品は、初期のものを除いては、ほぼ一貫して日常の生活感情を平明な言葉でうたう、という特色を示している。が、彼は敗戦前には北園克衛の主宰する雑誌「VOU」に参加し、モダニズムの影響が濃い詩を書いていた。

ここでは、彼の詩論、評論のうち、敗戦前のもものと戦後初期のもの（一九五七年まで）とを比較することによって、彼を「生活派の詩人」「生活詩人」へと方向づけることになった。戦争体験の、彼にとつての意味を考えてみたい。戦後の詩論、評論の考察を一九五七年までと限ったことには、特別な理由はない。評論集『内部と外部の世界』（一九五七年十月昭森社発行）に収められている詩論、評論の最も新しいものが一九五七年に発表されており、彼の評論活動を眺めても、一九五〇年代半ばをひとつの節目ととらえ得ると考えたからである。

さて、今手元にある彼の詩論、評論のうち最も古いものは「素材に就いて」であるが、その中に次のような言葉が見える。

かようにして詩人は常に現実に対して木に登った脱獄囚のやうに睨かれた眼を閉いてゐることが考えられるに違ひない。そして此の際僕のコースは現実に於いて事物それ自身がいかにあるか、といふことから出発することである。それは客観的事実或ひはその秩序を先づ肯定し信頼することによつてと云へるかも知れない。例へばひとつの物体を捕へる場合に先づその物理的面に於いて捕へることに外ならない。屢々過去の芸術家は物体又は現象によつて惹起された心理的面に頭を突込んでしまふことによつて自ら溺れ、それを忘れてしまつたと云へる。

僕等にとつてポエムはひとつの客観性を持つ独立体であり、ひとつの自動的な存在であることによつてのみ意義を持つ。それは何物にも隷属しない。詩人にすら隷属しない。それ自体が実体なのである。

このように、黒田三郎の詩論の発表は、詩作において客観的、科学的認識を尊重し、詩は「ひとつの客観性を持つ独立体、ひと

詩、言葉の心理面の扱いに違いがある。このことを指摘しておいて、次に戦後の詩論、評論に移る。

戦後に執筆され、戦後最も早く発表されたのは「言葉への不信について」（「ルネサンス」一九四七年二月号）であった。だが、この小論文の題を「言葉への不信」としたのは、その評論の発表が戦後最も早かったという理由からではない。

黒田三郎は戦後の詩論に、恐らくは自分自身への反省を込めて次のように書く。

詩を規定する社会条件に就いての考察が、人間の心理の秘密と陰影、詩人の現実的生活そのものの具体的な存在の仕方を、安易に見逃したところに、建設される危険については、今更、言ふ迄もないかも知れぬ。

（「詩は何処へ行くか」「純粋詩」一九四七年六月号所収）

（詩は）生きてゐるひとびとの胸にちかにふれ得るところに、其の存在理由がある。ちかにふれ得るとは、生活そのものの中に、我々の憤懣、絶望、憎悪、不信、屈辱、宿願、希望、悲哀、微笑等の中に、自由な出入口を持つことである。

（「詩人の運命」「純粋詩」一九四七年七月号所収）

詩に対する戦前の考えと比べると、むしろ知の面よりも情（心理）の面に重きを置いていることがわかる。詩（言葉）に表わされる思想と現実（生活）との関係を考えるとき、詩人の思想を形づくるのは、現実を巨視的にとらえた知的な認識ではなく、日々

の生活の場面場面における微視的な感情的な判断の集積であり、またそうあるべきである、という主張、言葉の心理面が軽視されるとき、言葉は現実（生活）を離れた自動的存在となりやすい、といった考えも他の詩論、評論に見える。先の二つの詩論と同時に発表された「物わがりのよさについて」（「VOU」一九四七年七月号）には「戦ひ敗れて故国に帰つて来たとき、先づ心をつたれるのは、余りにも物わがりのいい言論で以てすべての印刷物があふれてゐる、といふことである」と書かれている。戦後、南方ジャワから帰つて来た黒田三郎が活字に飢えた目で読んだものが、自分や自分の周囲の窮乏生活とほとんど関わりを持たない物わがりのよい言論、聡明で高尚で美しいというだけの言葉であったことが、言葉に対する目を、戦前には持たなかった目を開かせたのである。

詩人のモラリティについての戦前の考えでは、詩人の、言葉そのものに対する誠実の意識、詩人の行動、現実（生活）と言葉との関係は希薄であったが、戦後の詩論、評論ではそれらをより厳しく問うている。

むしろ、自己の愚かしさへの認識の道具として再び言葉が自己理解の助けとなるとき、人間と人間をつなぐ新しいつながりが、生れて出る余地がある。

（「言葉への不信について」）

ひとの言葉を信用できないとき、ひとに対する信頼は失われる。

もし自分自身の言葉を信用できないなら、自分自身への信頼さえ失われる。黒田三郎は言葉を、今あるがままの愚かしくみじめな自己を認識する道具とすることで、戦争によって失われた言葉と人間とのつながり（言葉への信頼と自分自身への信頼）、人間と人間とのつながり（人間への信頼）を回復しようとする。言葉が自己認識を欠くとき、「……どのやうな吝嗇家であつても、どのやうな狼狽であつても、かつては大東亜の建設を言ひ、今では、民主主義日本の建設を言ふことが出来る。」（「詩と文化」「詩評論」一九四七年五月号所収）という事態が起こるからである。

彼は、自分自身に語る言葉に誠実であることから人間への信頼の回復を始めた。そして言葉をよる自己認識とは、言葉を、日常生活の場面場面における心理との関係において、自分の現実（生活）とそこでの行動との関係においてとらえることを意味していた。言葉と行動との関係を論じる際に、彼はしばしば「事後的」「事前的」という概念を用いている。

言ふならば、世に行はれている言論の明らかなさと自由とは、それが事後的な考え方をすることによつてのみ、獲得され、それが主体を喪失するが故に合理的であることが屢々存在するやうに見える。（「詩と文化」）

戦後の反省が僕らの心に訴へないのは、事後に於いて設定された規準に依つて過去を照合する結果、半面の真理しか含まないためである。

（「知性の役割」「centre」一九四八年六月号所収）
事後的な自分が事前的な自分であり得ない所に過失と誤謬の歴史があり、批判者は余りにも屢々イジイゴイキングに、事後に於いてのみ可能な条件を遡及して事前的な存在に押しつけるのが常である。（「同」）

世の中に流通している言論は、事後的に他者を批判したり、言葉を意図的に使うことで自己を正当化しているものが多いが、行為、行動の結果としての詩の言葉に対して詩人は責任を負わなければならぬ、として次のように書く。

生起に反して、批判が常に所与の結果からのみ出発するのにならぬ、詩は生起そのものにつれて、生起そのものゝなかから発掘される。

（「詩の暗夜」「UMOUR」一九四七年五月号所収）
結果として生まれる詩は、ひとつの行為を示すものであつて、それは詩人の自己認識以外の何ものでもない。（「同」）
人間は成る所のものであり、自分が何であるかは、成る所に依つて決定される。自らを自らに依つて開明せんとする意欲そのものが、事前的行為に於いてのみ、自己認識をもたらすのである。（「同」）

黒田三郎はキルケゴールやニーチェ、ヤスパースを戦前から読んでおり、特にニーチェに心酔していたが、実存主義的な考えを、このように言葉と行動との関係に結びつけたのは、サルトル

ルの影響によると思われる。北村太郎氏は『黒田三郎日記・戦後篇I』の解説で「本書の特徴を、もし一言でいえといわれるなら、わたくしはやはり実存主義的というよりほかはない。」と語っている。実存主義的であることは、詩や評論、評論においても戦後の黒田三郎を特徴づけている。しかも、言葉と行動との関係の考察に実存主義を直接的に持ち込んだところに、黒田三郎らしい特徴があると思う。意志なくして行動があり得ないものならば、戦後の詩論、評論では、言葉の情(心理)の面ではたらくが重視されると共に、意志の面ではたらくも重視されるようになったと言ふことができよう。

戦後の詩論、評論の特徴として、今ひとつ、「私」の強調、個人の強調を挙げておく。「私」の強調と言っても、他者から区別されるための特殊性を強調するのではなく、他者との共感を可能にするところの「私」の強調である。

「私」は、自分自身を指し示す、その主体性に於いてのみ、個々の無数の私に通ずるのである。「私」が特定の私を指し示すとき、無数の特定の私を、「私」を我が事として受け入れる可能性が生れ出でる。(「詩と文化」)

……世界に於いて各自が夫々ひとつの限られた自らの立場を取らざるを得ない、といふ点に於いて、あらゆる人間に共通し、しかも、ひとつの限られた立場に反映される世界から、その立場の歪みを通して、人々の共感に訴へるものが滲み出、

形を取ってくるのであり、…

〔「精神の岐路」「cendre」一九四八年一月号所収〕
戦前の、詩作における客観性の尊重と、戦後の、「私」の強調、社会的に制約された個人の立場の強調とを見比べたのち、戦後に共通する「詩は民衆のものである」という言葉に目を移すとき、その意味するものが戦前と戦後とは異なっているのではないかと気づく。戦前の詩論、評論の中で先の言葉が見えるのは「詩人の体験について」である。この詩論は、戦前に執筆され、戦後最も早く、「近代詩苑」一九四六年二月号に掲載されたのだが、当時、黒田三郎はまだ日本に帰って来ていなかった。

詩は民衆のものである。それはひとつの客観的文化財であり、客観的文化財として価値あるもののみが生命を保つのである。それは常に現在の存在としてひとつの眼の前にある。詩人の影は無い。……
そしてまた詩人は詩の創造者であると共に、民衆の一人である。

もうひとつ、敗戦前の日記から「民衆」の用例を引く。『黒田三郎日記・戦中篇Ⅳ』の昭和十七年六月十一日の記事からである。そこにいかなる理由があるにせよ、民衆によまれない詩というものはかなり妙な存在である。

次に、戦後の詩論、評論からいくつかの用例を引く。

△民衆へのオプチミズムは、必しもわれわれのものではない

いのである。というのは、民衆とは、僕であり、君であり、あなたであり、諸君であるからである。

（「日本の詩に対するひとつの疑問」一九四八年発表、発表誌未確認、『内部と外部の世界』所収）
詩人が民衆のひとりであるということは、詩人が集団の裡に呑まれて、自己を失ってしまうことを意味しはしない。詩人が群衆の影に紛れこんで、個性を失ってしまうということではない。

（「民衆と詩人」「詩学」一九五〇年、五巻九号所収）
集団において、ひとびとは催眠術にかけられた被術者のように、個人的な責任観念からぬけ出して感情的に、感染しやうい存在となりやすい。

（「詩人と権力・3」「VOU」一九四九年十一月号所収）
民衆が正に民衆であるところに、どのような心理が発生したかを省みることが、同時に組織や党派のなかにいる個人が、どのように個人そのものからかけはなれたものとなるかということの自覚である。

（「同」）
敗戦前に考えられていた「民衆」とは、詩の読者でありまた詩人がその中に含まれ、客観性を保証するところの多数者を意味するようである。そこには「民衆」へのオプティミズムがある。しかし、戦後南方から帰り、敗戦前には戦争を賛美し、それに奉仕していた「民衆」が、今は民主主義を謳歌しているのを見て、「民

衆」へのオプティミズムは崩れ去った。「民衆」を構成しているひとりひとりの責任観念を問うことなしには「民衆」を信じることができなくなつたのである。戦後の考えでの「民衆」は、それぞれに主体的な自己と責任観念を持った「私」——個人の集まりと——言うことができる。黒田三郎は、より広い階層のより多くの人人に読まれる詩を考え続けた詩人であったが、戦後に「詩は民衆のものである」と主張するときの「民衆」には、ただ多数者という意味にとどまらず、そのひとりひとりのモラルリティを問う意識が含まれていたことに注意すべきである。

〔まとめ〕

黒田三郎の履歴上の戦争体験は以下の通りである。
南洋興発株式会社社員として東部ジャワ、パルスワン近くのケダウン製糖所に勤務中の昭和二十年二月、現地召集により、マラン独立大隊に入隊、速射砲をひいてジャワ北岸を演習して回る。陸軍二等兵。同年八月、敗戦、十月、インドネシア警官に拉致され、日本人全員マラン独立大隊に集結、そのままスメル山麓ポトオンボ珈琲園に移り、インドネシア軍の監視下に農業に従事する。同二十一年五月、インドネシア軍との協定成り、プロボリンゴ港より出港、出発に先立って日記その他詩に至るまで悉く焼却。七月、名古屋上陸、焼野原の鹿兒島市に帰る。（以上、自筆年譜による）

見たところ、実際の戦場体験はない。俘虜生活がいかなるもの

であつたか知るべくもないが、いわゆる極限状況の体験はないようである。南方での体験を語っている資料は少ないものの、その少ない記述から察せられる限りでは、農園、製糖所の管理者としての生活は放逸なものであり、インドネシア警官に拉致される時には、どこか間の抜けた風に輕輕と自分の運命を他人にゆだねた、とのことである。昭和二十一年七月二十日の日記に見える佐多忠降氏宛の手紙には「ジャワではどこでも多数の原住民を使用し、單に之を指導監督したというだけで、軍政というものがそもそも植民地そのものには寄生虫的存在であるし、自分自身として何かをやってきたというような自負も何もありません。」とある。ここで言いたいのは、戦争が黒田三郎に与えた影響は、外地での体験によるものより、帰還後の、戦後の窮乏生活と、飢えた目であったのではないか、ということ。戦後の窮乏生活と、飢えた目で読んだ言論の数々こそが、黒田三郎の戦争体験なのではないか。そして、戦後の彼を方向づけた戦争体験の彼にとつての意味を一言で約すなら、「言葉への不信」となると思う。南方から帰つた彼は、自分や自分の周囲の生活、その愚劣さ、みじめさに関わりを持たない美しく高尚な言論が流通しているのを見、敗戦を境に思想を百八十度転回して恥じることのない知識人を見、虚偽と欺瞞に満ちた人々の言動を見た。それだけではなく、彼自身の中に虚偽や自己欺瞞、生活への反省なく高尚な言葉、といったものを見出し、言葉と人間に対する信頼を失つた。言葉を信用し

ないことは、誰をも、自分自身をも信用しないことを意味したのである。のちに彼は、「言葉への不信」を言葉で書くことの矛盾を自ら指摘し、記しているが、詩人にとつて、言葉への信頼を、さらには人間への信頼を回復するのは、書くことによつてしかなし得ないのではないか。彼は、自己の愚劣さ、卑小さを認識する道具とすることで、言葉を信じようとした。戦後の詩の特徴であるアイロニカルな自己批評、詩論、評論の特徴である「私」性、個人性は、ここを発想の原点としている。同時に彼は、言葉を再び見失わないために、自らの言葉に制約をつけた——制約をつけたと言つても、彼にとつてみれば、必然的な過程であつたらう——。詩の言葉には日常語を用いること。言葉を生活によつて律し、詩人のモラルティを言葉と生活との関係の緊密に置いたのである。戦後の詩の多くが日常生活の体験から発想されてきているのはここによつてゐる。彼を「生活派の詩人」「生活詩人」へと方向づけたのは、「言葉への不信」であつた。

黒田三郎は戦後、言葉とそれが表わす事実や経験との間に緊張感のある、すぐれた詩を数多く書いた。しかし、言葉と詩人との間の緊張感によつてすぐれた詩がいくつあるだろうか。彼の言葉は彼の生活になぎ留められ、彼から速く離れて飛翔することはなかった。「言葉への不信」が再び彼を訪れることはなかった。それは、彼にとつて、幸いでもあり、不幸でもあつたと思う。

注Ⅱ引用文の原文に見られた漢字の旧字体は新字体に直してあ

る。かなづかいは原文のままとしたが、引用が初出雑誌から、比較的新しく出た単行本から、とまちまちであるため、新旧かなづかいの統一がない。

〔付記〕 論からは離れるが、今回黒田三郎の詩論、評論や日記を調べていて気がついたことがある。それは、彼が詩や詩論、評論を書くとき、しばしば過去の日記や原稿からモチーフを得ていたのではないか、ということ。詩論には戦後になってから現れる「詩を詩でないものからつくる」といった考えが、すでに昭和十六年十一月十一日の日記に見られるのを好例として、他にも同じような例がいくつかあること、『日記』からうかがえるように、彼がしばしば自分の日記を読み返していたことを考え合わせると、推測は恐らく誤ってはいない。そこで、執筆時期に隔たりのある詩論、評論を比較する際には注意を要する。この小論文でも見たように、同じ言葉を使っている、その意味するところが微妙に違う、といった場合が出てくるからである。

〔付録〕 戦前の著作・発表誌。ただし、はなはだ不完全なものであり、これからも補ってゆくつもりである。

——詩——

一九三八年

「秋立ちぬ」 「VOU」 21・一月号

「善に就いて覚え書」 右に同じ

「青いブランコ」 「VOU」 22・四月号

「夜の歌」 右に同じ

一九三九年

「春宵」 「VOU」 26・四月号

「季節風」 右に同じ

「歌」 右に同じ

「ボエム1」 「VOU」 27・八月号

「ボエム2」 右に同じ

「ボエム3」 「VOU」 28・十二月号

「ボエム4」 右に同じ

「ボエム5」 右に同じ

「Fragment」 右に同じ

「季節風」 「文芸汎論」 五月号・九卷四号

一九四〇年

「微風」 「VOU」 29・五月号

一九四一年

「罌粟（1のみ）」 「文芸汎論」 四月号・十一卷四号

「螺旋階段をのぼる」 「文芸汎論」 十二月号

一九四二年

「またあした」 「新詩論」 第五十八（三月八日）号

「傍観者の出發」 「新詩論」 第六十六（十一月一日）号

一九四三年

「蝙蝠傘の詩」 「新詩論」 第七十五（八月一日）号

——詩論・評論ほか——

一九三八年

「三原色の蹊」 「VOU」 21・一月号

「はがき通信」 右に同じ

一九三九年

「はがき通信」 「VOU」 26・四月号

「はがき通信」 「VOU」 27・八月号

「素材に就いて」 右に同じ

「戦争とハヴナットの世代に關する覺書（未完）」 「VOU」

28・十二月号

一九四〇年

「詩を愛する友へ」 「新技術」 十二月号

一九四一年

「詩の自明性」 「新技術」 四月号

「詩人礼讃」 右に同じ

一九四二年

「詩人を中心とする四つの三角形」 「新詩論」 第六十一（六月

一日）号

「ありのままにかくことについて」 「新詩論」 第六十三（八月

一日）号

「詩と詩人」 「新詩論」 第六十六（十一月一日）号

一九四三年

「詩と文明」 「新詩論」 第七十一（四月一日）号

「詩と文明」 「新詩論」 第七十二（五月一日）号

「よむに耐へるものについて」 「新詩論」 第七十四（七月一日）

号

（高校教師）

研究室受贈圖書雑誌目録（六）

中世文芸論稿（龍谷大学中世文芸談話会） 第九号

調査研究報告（国文学研究資料館） 第六号

通信（東京外国語大学） 第五十二号 第五十三号 第五十四号

鶴見大学紀要 第二十二号

東横国文学 第十七号

同期国文（同期大学） 第十八号

富山大学教育学部紀要 第三十三号

奈良大学紀要 第十三号分冊

南山国文論集（南山大学） 第九号

日本語研究（東洋大学） 第一輯

日本語と日本文学（筑波大学） 第四号 第五号

日本語日本文学（輔仁大学外語学院） 第十一号

日本文学研究（大東文化大学） 第二十四号

日本文学研究（梅光女学院大学） 第二十一号